

## 感嘆符（！）から感嘆符（！！）、そして感嘆符（！！！）へ

### － 思わずしゃべりたくなっちゃう子の育成 －



実施担当者 広島市立観音小学校  
教諭 加納 真知子



#### 1 はじめに

本校は、令和4年度から、理科・生活科を中心とした実践的研究に取り組んでいる。令和5年度からは、公益財団法人中谷財団様から、科学教育振興助成を受け、3年間、講師を招聘しての継続的な理論研修や授業研究、先進校の研究視察、設備機器や教材・教具等の環境整備等に計画的に取り組んできた。

令和6年度に開催された全国小学校理科研究協議会研究大会では、感嘆符を発しながら学習に取り組む子どもたちの姿、児童と教職員が一体となって授業を創りあげる様子を全国に発信し、たくさんの肯定的な評価をいただいた。

理科・生活科の教科研究を進める中で見えてきたのは、土台である学級づくりの重要性である。そのため、令和7年度は、研究主題（「感嘆符（！）から感嘆符（！！）、そして感嘆符へ（！！！）～思わずしゃべりたくなっちゃう子の育成～」）は継続し、理科・生活科の研究を進めながら、「教科指導で学級づくりを行う」をテーマに研究を深めていくこととした。

教職員による授業改善や意欲の高まりは着実に進んでいるが、教職員の入れ替わりもあり、授業づくりの方法をどのように共有するか、一体となつての研究推進に向けて教職員の意識をどのようにそろえていくか等も課題であると考えている。

本稿では、本校が取り組んできた実践的研究の概要やアンケート調査等で明らかになった成果と課題等について、「授業づくりの取組」や「学級づくりの取組」、「教職員の一体感を高める取組」の観点から紹介する。

#### 2 授業づくりの取組

授業づくりにおいては、学校全体としては、「感嘆符を生み出す手立てが有効であるか？」を視点として、授業研究に取り組んだ。その他、各学年、授業者が、児童の実態や教材の特質等を踏まえ、主体的な学びにしていけるための手立てを、工夫しながら授業を構想し、実践に取り組んだ。

## 2-1 「個別ちょい適」の実践

<実践事例1：単元名『ものの重さ』（第3学年）>

「形を変えると、ものの重さはかわるのだろうか。」（第4時／全7時間）

「形を変えても粘土の重さは変わらない」という学習をした後、「他のものだったら、重くなったり軽くなったりするのだろうか？」と発問した。児童から調べたいものとして、折り紙、アルミホイル、新聞紙、ペットボトル、モール、レゴの意見が出た。そこで、この中から自分が確かめたいものを選んで問題解決に取り組む「個別ちょい適」で実験を行うこととした。「個別ちょい適」を適切に取り入れることで、児童が主体的に取り組むことができると考えている。それぞれの結果を集約し、1つの結論にまとめる単複線型の問題解決により、形を変えてもものの重さは変わらないということを一般化することができた。



観音小学校では、「問題の見いだし」を中心に、実証性があり検証可能なものは、できる限り子供の思いや願いが反映できる学習活動、「学習の個性化」を目指して取り組んでいる。取り組む中で、学習指導要領に示されている学習内容の保障、教員の数や教材・時間に限りがあること、評価の公平性等の課題も見えてきた。現時点では、可能な範囲で、「学習の個性化」を取り入れている。ちょっとだけでも学習の中で個別に課題に取り組むことを、本校では、「個別ちょい適」と呼んでいる。

## 2-2 「自信度マップ」の実践

<実践事例2：単元名：『ものの温まり方～ナゾを解いてホッとしよう～』（第4学年）>

「水は、どんな順であたたまるのだろうか。」（第8時／全11時間）

第1次で金属の温まり方、第2次で空気の温まり方を学習した後、水の温まり方の学習に取り組んだ。自分達の予想について交流する場面では、「自信度マップ」を用いた。「自信度マップ」を使う理由は2つある。1つ目は、自信がある児童を中心に根拠となる考えをクラス全体に広げるためである。これにより、生活経験を思い出したり、既習事項を振り返って共通点に気付いたりすることが期待できる。2つ目は、児童どうしの意見交流が活性化すると考えるからである。根拠が明確でない意見も、クラス全体に巻き込んで考えることで、納得いく根拠が発見でき、分からないという意見を大切にしながら授業を創りあげていくことができる。また、自信度が変わったり意見が変わったりしても、それには明確な理由があり、友達の意見のおかげで変わったと価値付けることができる。このように、「自信度マップ」を活用することで、主体的な学びになるとともに、お互いを認め合い、クラス全体で学習することの楽しさを感じさせることもできると考えている。



## 2-3 「子どもたちが練り上げる実験計画」の実践

＜実践事例3：単元名『ふりこ～ふりこの謎を解き明かせ～』（第5学年）

「ふりこが1往復する時間は、何が関係しているのだろうか。」（第4時／全8時間）

実験計画や操作方法に慣れるために、まず、振れ幅の実験は、一斉指導で行った。その後に行う振り子の長さ、おもりの重さの実験は、それぞれ自分が確かめたい方を選択させた。振れ幅の実験と、長さ・重さの実験を段階的に行うことにより、実験計画を立てる力の高まりが期待できると考えている。実験計画を立てる際には、個々の計画の質を高めることをねらいとしていくつかのワークシートから自分の書きやすい形式のものを選ぶことができるようにした。個人で立てた計画をグループで説明し、アドバイスし合う時間を設けたり、実験計画を立てるときや実験中、他の班を見に行くことができる、といった自由度をもたせたりし、他者の考えに触れることで、ヒントを得たり、納得したりできるようにした。



## 3 学級づくりの取組、教職員の一体感を高める取組

昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、本年度は、教科研究を進める上で土台となる学級づくりにも重点を置き、学校全体として、研修や情報交換の場を設けたり、積極的に実践したりしてきた。学校全体として取り組むことは、教職員の一体感を高めることにもなっている。

### (1) 「信頼関係を深めるコミュニケーションの取り方」研修

より良い関係を構築していくため、コミュニケーションスキルを学ぶため、教師学上級インストラクターの三上かおり先生を講師としてお招きし、4月、9月、1月の3回、教職員を対象に、校内研修会を実施した。「聴く」、「叱る」、「ほめる」をテーマに講話や演習に取り組んだ。児童とのコミュニケーションや学級づくりは勿論のこと、保護者対応や教職員間のコミュニケーションにも繋がる価値ある研修となった。

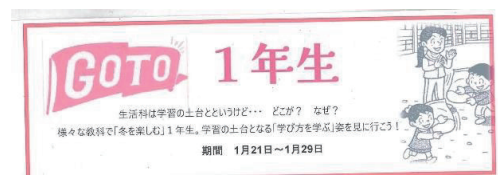
### (2) 「プロジェクト」や「マルトーク」

昨年度まで行ってきた「プロジェクト」～校内研修会とは異なる会場や雰囲気で行う主体的な集まり～に加え、今年度から様々な情報交換の場の「マルトーク」の活動が始まった。

子どもが見通しをもてる指示の出し方、子どもをのせるリズム・テンポの裏ワザ、子どもたちを引き付ける読み聞かせ、学級開きに役立つレクリエーション、作文指導の紹介等テーマは多岐にわたり、明日からの授業、指導に役立つ内容となっている。このように、自由に情報交換する場があることで、教職員の一体感が高まっていることも大きな成果と考えている。

### (3) GO TO クラスルーム

研究部企画で、普段の他学級の教室、授業に足を運ぶ「GO TO クラスルーム」を実施している。ねらいは、①他者の実践から学ぶ機会を作る、②教職員が助け合える風土を作る、③研究授業が行われる学年の様子や児童の実態を全体で共有し授業研究に生かすことである。参観して感想を交流することは、参観した教員、された教員、双方にとって大変良い機会となっている。



#### 4 まとめ（成果と課題）

取組を分析するため、令和8年2月に、児童並びに教員を対象にアンケート調査を実施した。

(1) 児童アンケートから（令和8年2月実施）

質問項目	R 6		R 7	
	肯定的回答 (%)	肯定的回答 (%)	そう思う	少し思う
① 理科の勉強は好きですか。	85.6	<b>84.8</b>	53.6	31.2
② 理科の時間に調べる「問題」を自分でつくることができる。	86.3	<b>89.3</b>	52.4	36.9
③ 自分の考え（予想や実験計画、考察）を友達に伝えることは楽しい。	72.2	<b>74.7</b>	35.3	39.4

「①理科の勉強は好きですか。」の項目に対して、肯定的回答をした児童の割合は84.8%であった。昨年度と同程度の割合で、概ね良好な数値であった。「②調べる『問題』を自分でつくることができる。」の項目に対する肯定的回答の児童の割合は89.3%で、昨年度と比較すると3%上昇した。本年度の課題としてあげていた「③自分の考えを友達に伝えることは楽しい」の項目に対する肯定的回答の児童の割合は74.7%で、2.5%上昇した。

(2) 教員アンケートから（令和8年2月実施）

質問項目	肯定的回答	そう思う	少し思う
① 児童の理科の授業への学習意欲が高まった	<b>100%</b>	83.3%	16.7%
② 児童の理科の学習内容の理解を深めた	<b>100%</b>	91.7%	8.3%
③ 児童の観察・実験などに関する技能を高めた	<b>100%</b>	66.7%	33.3%
④ 児童は、自分の考えの交流を楽しんでいるように感じた	<b>100%</b>	58.3%	41.7%

学習意欲、理解、技能、交流のいずれの項目においても、肯定的回答が100%であった。ただし、「④児童は、自分の考えの交流を楽しんでいるように感じた」の項目は、他の項目と比較して、「そう思う」の割合が低い数値となった。また、教員アンケートにおいて、「分かった！」「なんで？」などの感嘆符を生み出す授業を目指して、教材研究や授業づくりに取り組むことができた」と回答した教員の割合は96%であった。

(3) 全国学力・学習状況調査の結果から（令和7年4月実施）

	令和7年度		令和4年度	
	本校	全国	本校	全国
【理科】平均正答率	<b>59</b>	57.1	61	63.3
知識・技能	<b>55.2</b>	55.3	60.1	62.5
思考力・判断力・表現力等	<b>61.9</b>	58.8	61.5	63.5

令和7年度の本校の結果は、全国と比較して、「理科全体」及び「思考力・判断力・表現力等」については2～3%程度上回り、「知識・技能」についてはほぼ同程度であった。令和4年度は、いずれも2%程度下回っていたことを考えると、取組を通して、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」は、着実に伸びていると考えることができる。

上述のデータから、児童は意欲的に学習に取り組み、着実に理科の資質・能力を身に付けていると考えることができる。ただし、年度当初に掲げた達成目標はクリアできなかったため、次年度以降も継続的に取り組む必要性を感じている。

教員の意識や取り組む姿勢も、全国大会後も継続していると考えられる。本年度新たに取り入れた学級づくりやコミュニケーションの視点も効果的だったと考えられる。

今年度の成果と課題を整理し、次年度も、研究を深化、発展していきたいと思っている。

#### 謝 辞

今回、公益財団法人中谷財団様から多大な助成をいただき、研究を推進し、全国に向けて発信することができました。心から感謝するとともに、厚くお礼申し上げます。